

ディズニープリンセス映画にみるジェンダー表現の変容 ——プリンセスの作動性に注目した量的分析¹⁾——

上 瀬 由美子*¹・佐々木 優 子*²

The transition of gender role portrayed in Disney Princess movies : quantitative analysis focusing on agency of princesses

KAMISE Yumiko and SASAKI Yuko

Abstract

This study examines gender roles portrayed by princess characters in Disney movies, focusing on their agency. The behavior of 12 princess characters in 11 Disney movies are analyzed on the basis of the following: the amount of talking time, the amount of aggressive behavior, the amount of helping behavior, and the amount of time spent with the prince. The results suggest that princess characters differ in their agency and association with their prince. Although princess movies portray some stereotypical representations of gender, the female roles have changed over time in the Disney Princess line.

[Keywords] Disney characters, sex role in motion pictures, gender stereotype, agency

問題

ディズニープリンセス

ディズニー長編映画には、1937年の「白雪姫」(Snow White and the Seven Dwarfs)以来、多くのプリンセス(お姫様)が登場してきた。2000年、ディズニーは8つのプリンセスキャラクターをDisney Princess line(日本ではプリンセスシリーズ)と銘打ち、少女向けのライフスタイルブランドとして商品化を始めた。売り上げは直後の2001年に3億ドルを超え、2005年には30億ドルとなり、2009年には40億ドル、その後も世界中で展開するブランドとして拡大している(The Walt Disney Company, 2005; Orenstein, 2006; 2011)。2006年時点でディズニープリンセスの商品アイテム数は2万5千を超えている(Orenstein, 2006)。The Walt Disney Companyのホームページによれば、ディズニーの公式プリンセスは、2015年11月時点で以下の11キャラクターである:白雪姫、シンデレラ、オーロラ姫(眠れる森の美女)、アリエル(リトル・マーメイド)、ベル(美女と野獣)、ジャスミン(アラジン)、ポカホンタス、ファ・ムーラン(ムーラン)、ティアナ(プリンセスと魔法のキス)、ラプンツェル(塔の上のラプンツェル)、メリダ(メリダとおそろしの森)。日本のディズニーストアでも、数多くのディズニープリンセス商品が販売されている。²⁾

ディズニープリンセスについては、その人気の反面、商品化され消費と結びついた形のジェンダーステレオタイプ、すなわち「女の子らしさ」が常に提示されていることが批判の対象となってきた(England, *et al.*, 2011; Giroux, 1997; Lacroix, 2004; McRobbie, 2008)。プリンセスシリーズの登場により少女やその親たちに、ディズニープリンセスはさらに大きな影響を与えるようになったと考えられる(Orenstein, 2011)。

* 1 立正大学心理学部教授

* 2 株式会社アールエスエス

メディアにおけるジェンダーステレオタイプ

ジェンダーステレオタイプは、人間を男女という性別カテゴリーに分類した際に、それぞれの性別に含まれる人が多くもっているとイメージされている特徴である。ジェンダーステレオタイプには多様な内容が含まれているが、男性的特性の核として作動性 (agency)、女性的特性の核として共同性 (communion) があると指摘されている (例えば Eagly & Steffen, 1984; Willams & Best, 1982)。ここで作動性とは自己主張や自己達成あるいは支配への傾向を示す概念で、活動的・攻撃的・独立的といった形容詞と結びついている。一方、共同性は他者のことを考え協調する傾向を示す概念で、やさしい・暖かい・従順といった形容詞と結びついている。また土肥・廣川 (2004) は、男性性の側面を肯定的作動性 (積極的に活動する、自分の意見は主張するなど) と否定的作動性 (人に攻撃的な態度をとる、他人を自分のいいなりにさせるなど) に、女性性の側面を肯定的共同性 (人と協力できる、思いやりをもって人と接しているなど) と否定的共同性 (他人のことを気にしすぎる、すぐに人に頼ることを考えてしまうなど) に分けて、それぞれの傾向を測定する共同性-作動性尺度 (CAS: Communion-Agency Scale) を開発している。

このようなジェンダーステレオタイプが社会で広く共有されている背景のひとつに、メディアによる強化がある。例えば、様々な子供向けプログラムにジェンダーステレオタイプが含まれることが指摘されている。Leaper, *et al.* (2002) では、マンガのジャンル別にステレオタイプ化されたメッセージを分析しているが、どのジャンルにおいてもステレオタイプ化されており、中でも冒険モノに特に多いと結論づけている。日本でも、国広 (2012) や諸橋 (2009) において、メディアとジェンダーの問題がまとめられている。

このようなメディアにおけるジェンダー化されたスクリプトは、子どもの現実場面での対応にも影響する (Durkin & Nugent, 1998)。青年を対象にした調査においても、例えば Eggermont (2006) は、テレビ視聴が恋愛関係を重視する傾向に結びつくことを指摘している。また、Serewicz & Gale (2008) は、個人が保有する社会的スクリプトや規範の理解が、デートや性的駆け引きといった恋愛行動に影響することを明らかにしている。さらにテレビ番組を多く見ることが伝統的な性別役割観と結びつきやすいことや (Frueh & McGhee, 1975; Williams, 1981)、子供のジェンダー意識の発達にテレビが大きな影響力をもつことも考察されている (Leaper, 2000)。

このようなジェンダーステレオタイプは、女性自身にも自覚できない部分で、影響を与えているとの指摘もある。例えば Rudman & Heppen (2003) は、IAT を用いて、「恋愛相手=プリンス」「恋愛相手=普通の男性」の相対的連合強度を測定した。その結果、恋愛相手をロマンチックなヒーロー像と結びつけるファンタジーを有している女性ほど、社会における自分自身の地位や力を得ようとする願望が低いことが明らかとなった。この論文では、自動的に活性化したり無意識の部分に存在しているジェンダーステレオタイプが、女性に対し、社会で男性と競うことを抑制することにつながっていると結論づけている。

ディズニープリンセスに対する批判

本研究が注目するディズニープリンセス映画においても、その中に含まれるジェンダーステレオタイプ化された描写が批判の対象となってきた。例えば Lacroix (2004) は、プリンスの多くが白い肌で、細いウエスト、豊かな胸、細く長い手足をしていることに、人種あるいはジェンダーに関連したステレオタイプがあるとしている。Towbin, Haddock, Zimmerman, Lund, & Tanner (2003) は、ディズニー26作品を分析し、初期の作品と比べれば近年は低減してきているものの、依然として文化的にステレオタイプ化された描写が含まれているとしている。

日本においても、ディズニー映画に対するジェンダー視点からの考察が行なわれている。例えば若桑 (2003) は、ディズニープリンセス映画の初期3作品 (白雪姫、シンデレラ、眠れる森の美女) を取り上げ、これらのプリンセス・ストーリーが女の子に偏った価値観を植え付けてしまうことを問題視している。若桑 (2003) では、プリンセス・ストーリーの主人公が非常に非主体的であり、「女の子は美しく従順であれば、地位と金のある男性に愛されて結婚し、幸福になれる」というメッセージが既存のジェンダー意識を再生産させる金の卵になってしまっていると述べている。

その一方で、近年のディズニープリンセス映画は、初期の物語構造と比べるとジェンダー描写が変化してきているとの論考もある。例えば、李・高橋 (2011) は2007年までの8作品 (白雪姫、シンデレラ、眠れる森の美女、リトル・マーメイド、美女と野獣、アラジン、ムーラン、魔法にかけられて) に対する考察を行なっている。ここでは、確かに初期の3作品は受動的なプリンセスが描かれているが、「リトル・マーメイド」以降は、たくましさ、精神的なタフさ自活力などが感じられ、初期の3作品とは著しく異なっていると指摘されている。また物語のエンディングに関しても、初期

の3作品では結婚で物語が終わるが、次第に結婚というはっきりした形で終わらないものが増え、相手も必ずしも王子ではなく魅力のある一般男性がプリンス（王子）の役割を担うある場合も現れている。さらに「美女と野獣」以降は、恋愛描写にもプロセスが追加され、出会ってすぐ恋に落ちるといったこれまでの作風が変化していると考察されている。

また、照沼（2012）は、2011年に公開された「塔の上のラプンツェル」について、初期の3作品のような王子任せの受動的な存在から、自由と自立を求めて自ら旅立つ女性へと変わってきていると指摘されている。さらに斉藤（2014）は、ポカホンタスやムーランを、「王子いらず」の自立した少女キャラクターと表現している。

ディズニープリンセスの行動分析

前述のディズニープリンセス分析の多くは、質的な分析に基づいているが、ジェンダー描写の時代的变化を量的に示す試みも行われている。代表的なものに England, Descartes, & Collier-Meek (2011) がある。この研究では、2009年の「プリンセスと魔法のキス」までのディズニープリンセス映画9作品を対象にして、プリンセスとプリンスのジェンダー化された行動・特徴の出現頻度を数えている。具体的には、ジェンダー化された特徴をあらかじめコード化し、各作品のプリンスとプリンセスそれぞれについて、シーンごとに、ジェンダー化された各特徴が出現した回数を数えた。男性的特徴とは、身体的強さ、自己主張、独立性、勇気、などであった。女性的特徴とは、身体的弱さ、感情表出、繊細さ、養育、手助けなどであった。内容分析の結果、映画の中でプリンスは男性的な特徴を、プリンセスは女性的特徴を示す割合が有意に高かった。さらに9作品を、初期（白雪姫 シンデレラ 眠れる森の美女）・中期（リトル・マーメイド 美女と野獣 アラジン ポカホンタス ムーラン）・最近（プリンセスと魔法のキス）の3期にわけて時代による変化を検討した。その結果、初期の3作品では、プリンセスは女性らしい行動のみをしているのに対し、最近の3作品では、男性らしい行動と女性らしい行動の両方をし、最もアンドロジニー的であった。一方、プリンスには時代による有意な特徴の変化はみられなかった。以上の分析結果から England, *et al.* (2011) は、物語におけるプリンセスの役割が、解決をただ眠って待っているような受身的なものから、プリンスを手助けする積極的なものへと変化していると結論づけている。その一方で、理想的女性像として描かれるプリンセスは、「女性的」行動をとることで、結果として多くの報酬（富や尊敬）を得ており、ディズニープリンセス映画は依然として伝統的性役割の強化を促進させていると論考している。また初期のプリンスとプリンセスは会った瞬時に相手を好きになっているのに対し、近年の映画では両者は困難を共に克服する中で関係を深めていく傾向があるが、異性愛の成就が中心的な結論である点には変化がないと結論づけている。プリンスとの共行動による愛の形成が描かれる近年の傾向については、李・高橋（2011）や荻上（2014）でも論じられている。

England *et al.* (2011) による分析は、ディズニープリンセス映画のジェンダー描写傾向の変化を量的指標を用いて明らかにした点で評価される。しかしながら、方法論的には課題も残されている。

第1は、女性性・男性性のコード化の根拠があいまいであり、作業の過程に解釈が含まれた可能性が残る点である。各シーンを見て、女性的特徴がみられるか男性的特徴がみられるかがコード化されているが、同じ行動でも文脈によって判断が異なっていたことが推察される。解釈が入り込む余地を少なくするためには、人物が起こした具体的な行動の回数や長さなど、客観的指標を用いることが有効と考えられる。

第2は、プリンスとプリンセスの共行動の量的分析が十分行なわれていない点である。England *et al.* (2011) ではプリンスとプリンセスの行動が別々にカテゴリー化され頻度が数えられているため、二人の行動の関連性は明らかではない。困難を共に克服する中で関係を深めていく傾向があることを確認するためには、両者が共に行動する時間の長さを実際に測定することが有効と考える。

第3は、分析対象作品である。England *et al.* (2011) が分析対象としたプリンセスは2009年の「プリンセスと魔法のキス」のティアナまでの9キャラクターであるが、その後、ラプンツェル（塔の上のラプンツェル）、メリダ（メリダとおそろしの森）の2人がプリンセス・シリーズに加わった。2013年に公開された「アナと雪の女王」にも、プリンセスが登場している。この映画に登場する2人のプリンセス（アナとエルサ）は、現在のところディズニーのプリンセスシリーズには含まれていない。しかし、「アナと雪の女王」は世界的なヒット作であり、日本でも2014年に公開されてからより近年の日本歴代3位の興行収入を記録（興行通信社, 2016）するなど、大きな影響力をもったと考える。ディズニープリンセスの変化を検討するためには、「アナと雪の女王」も含め、改めて分析することが必要と考える。

「アナと雪の女王」におけるプリンセスの作動性

「アナと雪の女王」は物語自体をみるとこれまでのディズニープリンセス物語の図式（プリンセスの愛や夢の実現、ハッピーエンドなど）を踏襲している。登場する二人のプリンセスも、動物や異形のものとのコミュニケーションでできること、外的・内的な美しさ、美しい歌声といった、それ以前のプリンセスと共通する特徴を保有している。

しかし、この作品については従来型ディズニーのプリンセス・ストーリーとは異なっていたことから多くの注目を浴びた。その1つは、主人公が最終的に獲得する愛が「プリンセスと王子」という異性愛ではなく、姉妹愛だった点である。従来型のプリンセス・ストーリーは、王子との恋愛を大きな柱として展開しているが、アナと雪の女王では王子との恋愛は話題の中心ではない。斉藤（2014）は、この物語には「邪心ある王子と役に断たないトナカイ男は登場するが、結婚ですべてを丸く収めるだけの力量を持ったヒーローは登場しない」（p17）と表現している。さらに細かくみると、アナがハンス王子に一目惚れをして愛が一端成就した後に、彼が悪人であることが判明する展開は、古典的プリンセス物語を裏切る形になっている。もう一方のプリンセスであるエルサは、そもそも恋愛を目的とした行動をしていない。このプリンセス像は「王子との結婚」を最終目的にしていた古典的なプリンセス像と一線を画している。

また斉藤（2014）は、この物語を「ひきこもりがちではあるが特殊な才能を秘めたヒロインを、社交性が高いもう一人のヒロインが『社会化』しようとする話」（p20）のひとつと位置づけ、エルサが封じられた自己の能力の発現を試みたものの、結局のところその力がアナの愛の力で「去勢」されてしまう物語だとしている。

この斉藤の論考を、前述の作動性と共同性の理論に位置付けるなら、エルサが物語の中盤で歌う「let it go」は、自己の作動性の発現・強化を自覚し賞賛するものといえる。そしてアナがエルサに求め、最終的にはエルサにとって本当に幸せなものとして描かれたのは、国民のために愛される存在となること、すなわち「共同性」であったといえる。

本研究の目的

上記のように、先行研究では、時代とともにディズニープリンセスの描き方がより主体的な姿へ変化したことが論考されている。本研究では、数量的な指標を用いて、2014年の「アナと雪の女王」までを含めてジェンダー描写の変化を確認することを目的とする。ここでジェンダー描写の変化の検討については、男性的ジェンダーステレオタイプの核とされる作動性に焦点を絞る。

また、近年のプリンセスは王子と二人で困難を乗り越えることによって恋愛感情を育てていると指摘されている（England, *et al.*, 2011；荻上, 2014；李・高橋, 2011など）。本研究では、この仮説について量的指標をもって確認することを目的とし、プリンセスと王子との共行動が時代と共に増加しているのか否かを検討する。

上記の目的に沿い、本研究ではディズニープリンセスが登場する11作品と、「アナと雪の女王」の、計12作品を対象に、以下の4つの指標を量的に測定する内容分析を行なった。前述のように、「アナと雪の女王」に登場する2人のプリンセス（アナとエルサ）は、2015年時点でディズニープリンセスシリーズのキャラクターにはなっていないが、同映画が日本で大きくヒットしたことを鑑みて分析対象に含めた。

1. プリンセスが話す時間

作動性は、主体性や自己主張の表出に含まれるとされる。土肥・廣川（2004）では、男性性を示す作動性の中でも肯定的作動性の側面として「主張すること」を位置づけている。本研究でも、もっとも日常的で身近な行為である、自分の考えを他者に伝えるという「話す」行動に、主張性が示されるものと考えた。具体的には、主人公であるプリンセスが、話しているシーンの時間を測定し、作動性を示す指標のひとつとして用いた。

2. プリンセスによる攻撃行動シーンの数

作動性の高さを示す形容詞として、Williams & Best（1982）は「攻撃的」をあげており、攻撃性は男性的特性のひとつとして位置づけられる。土肥・廣川（2004）では、攻撃性は作動性の否定的な作動性の側面である。本研究では、プリンセスが他者を攻撃しているシーンの数を数え、作動性を示す指標のひとつとして用いた。

3. プリンセスと王子の共行動時間

前述のように、初期プリンセスは一瞬で恋に落ちたり、王子に出会うことで自動的に結婚が決まっていたが、それが、時代を経るに従って、プリンセスと王子が困難を二人で乗り越えることによって関係が形成されていく傾向にあると分析されている。本研究では、実際に共に過ごす時間が増えているのか、王子とプリンセスの共行動時間を測定

し、時代による量的な変化を明らかにすることを試みた。

4. プリンセス―プリンス間の援助行動シーン数

初期のプリンセスに対しては、従順さ、受け身、他力本願さという、共同性の否定的側面が批判されている（若桑, 2000）。また荻上（2014）は、中期のプリンセスは「冒険し、自分で夢をつかもうとする」が「不幸な境遇を変えるチャンスは異性が与えてくれる」と考えていたとしている。これに対し、近年のプリンセスは、守られるだけの存在ではなく、積極的に道を切り開いているという指摘がなされている。荻上（2014）は、近年のプリンセスは「不幸な境遇を変えるチャンスは、同性を含む他者からの対話から生まれる」と考え始めた論考している。本研究では、プリンセスとプリンセスの力関係を示す指標として、援助行動に注目した。プリンセスからプリンセスへの援助行動、プリンセスからプリンセスへの援助行動のシーン数を数えることで、両者の関係のあり方の変化を示せるものと考えた。

方 法

分析対象

本研究の対象としたのは、表1に示す映画12作品とその中に登場する13人のプリンセスと、12人のプリンセスである（表1）。なおプリンセス・プリンセスは、必ずしも王女・王子という身分でない場合も含まれている。また「アナと雪の女王」に登場する悪役のハンスは、途中までプリンセスとしての役割を果たしているため分析対象に一部含めた。

表1 本研究の分析対象

作品名	(原題)	劇場公開年	プリンセス	プリンス
1 白雪姫	Snow White and the Seven Dwarfs	1937	白雪姫	プリンス(王子)
2 シンデレラ	Cinderella	1950	シンデレラ	チャーミング(王子)
3 眠れる森の美女	Sleeping Beauty	1959	オーロラ姫	フィリップ(王子)
4 リトル・マーメイド	The Little Mermaid	1989	アリエル	エリック(王子)
5 美女と野獣	Beauty and the Beast	1991	ベル	ビースト
6 アラジン	Aladdin	1992	ジャスミン	アラジン
7 ポカホンタス	Pocahontas	1995	ポカホンタス	ジョン・スミス
8 ムーラン	Mulan	1998	ムーラン	リー・シャン
9 プリンセスと魔法のキス	The Princess and the Frog	2009	ティアナ	ナヴィーン(王子)
10 塔の上のラプンツェル	Tangled	2010	ラプンツェル	フリン・ライダー
11 メリダとおそろしの森	Brave	2012	メリダ	
12 アナと雪の女王	Frozen	2013	アナ/エルサ	クリストフ/ハンス(王子)

分析方法

まず、当該作品のDVDを視聴して、全作品について構成表を作成した。構成表では、作品をシーンごとに区切り、登場人物、登場人物の行動、それぞれの行動の時間を記録し、各シーン何分何秒間誰が何をしたかがわかるようにした。さらに、構成表をもとに、以下の指標を測定した。

(1) プリンセスの話す時間

作品中で、プリンセスが何秒間発言しているのか、合計の時間を計測した。

(2) プリンセスによる攻撃行動シーン

プリンセスが攻撃を行うシーン（例えば「塔の上のラプンツェル」で、塔に侵入したフリン・ライダーをラプンツェルがフライパンで殴るなど）の数を数えた。

(3) プリンセス―プリンセス間の援助行動シーン

プリンセスから相手の男性に行った援助行動（例えば「リトル・マーメイド」のアリエルが嵐で海に投げ出されてしまったエリック王子を助け出すなど）シーン数と、プリンセスからプリンセスに行なった援助行動シーンを数えた。

(4) 共行動時間

プリンセスとプリンセスが同じ画面の中に何秒間映っているのか、合計の時間を計測した。

結 果

プリンセスの話す時間

プリンセスの話す時間が、本編の時間に占める割合を算出したところ図1に示すようになった。さらにこの割合が人

物によって異なるかカイ二乗検定を行なったところ、有意差がみられた ($\chi^2(12) = 1654.01$ $p < .001$)。残差分析 (1%水準) を行なったところ、話す時間の割合が有意に小さかったのは白雪姫、オーロラ、アリエル、ベル、ジャスミン、ムーラン、エルサである。逆に、割合が多かったのはラプンツェル、メリダ、アナである。

話す時間の長短は、ひとつにはプリンセスの置かれた状況が関係している。例えば、「眠れる森の美女」のオーロラ姫は、途中で呪いによって眠りについてしまうため、そもそも発言できるシーンが少ない。「リトル・マーメイド」のアリエルも、自分の声と引き換えに足を手に入れるため、話す割合が少なくなっている。また「アナと雪の女王」のエルサは、もうひとりのプリンセスであるアナと比較して登場シーンが少ないことが関係している。

England *et al.* (2011) は、一連のプリンセスを初期 (白雪姫 シンデレラ 眠れる森の美女)・中期 (リトル・マーメイド 美女と野獣 アラジン ポカホンタス ムーラン)・最近 (プリンセスと魔法のキス) の3期にわけている。本研究が分析対象とした「塔の上のラプンツェル」「メリダとおそろしの森」「アナと雪の女王」を最後の時期に含めて考えると、初期・中期はプリンセスが話している時間は短く、「話す」ことで自己主張するプリンセスの登場は最近の作品の特徴と指摘できる。

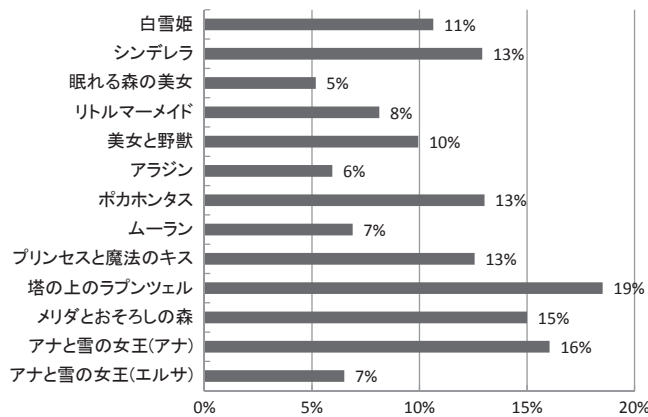


図1 プリンセスの話す時間 (本編の時間に占める割合)

プリンセスによる攻撃行動シーン

プリンセスが何かに攻撃するシーンを抽出したところ、表2に示すようになった。初期の3作品には攻撃行動は全く

表2 プリンセスによる攻撃行動シーン

作品名	攻撃シーンの内容
白雪姫	なし
シンデレラ	なし
眠れる森の美女	なし
リトル・マーメイド	トリトンに魔法をかけたアースラに飛びつく
美女と野獣	家に来て婚約を迫るガストンを追い出す
アラジン	ジャファーに妃になれと言われジャファーにワインをかける
ポカホンタス	なし
ムーラン	兵隊同士で喧嘩をする フン族との戦い 都でのシャン・ユーとの戦い
プリンセスと魔法のキス	カエルの姿をしたナヴィーン王子を叩く ナヴィーン王子を起こすために木の実を投げる ドクター・ファンリエからペンダントを奪い取る
塔の上のラプンツェル	塔に侵入したフリン・ライダーをフライパンで殴る 目を覚ますフリン・ライダーをフライパンで殴りクローゼットに閉じ込める 店の男たちをフライパンで叩く
メリダとおそろしの森	熊になったエリノアを殺そうとするファーガスを止めるため剣を向ける
アナと雪の女王	アナ 突然現れたオラフに驚き顔を蹴る マッシュマロウとの戦い ハンス王子を殴る エルサ ウエーツェルトン公爵の部下に殺されそうになるのを魔法で対抗する

みられない。中期以降は、数は多くないものの少しずつ攻撃行動が描写されている。攻撃対象は全体として悪役男性に向けられたものが中心である。これらの攻撃行動は、ラプンツェルが塔に侵入したフリン・ライダーをフライパンで殴るように、また国や皇帝を守るためにムーランがシャン・ユーと戦うように、自分自身や誰かを守るために行うものであって、プリンセスが理由もなく何かを傷をつけるようなシーンはみられなかった。

共行動時間

共行動の時間が、本編の時間に占める割合を算出し、その割合が作品によって異なるか検討した。なお、「アナと雪の女王」については、プリンセス2人のうち登場回数の多いアナと、最後にプリンスとなるクリストフとの共行動のみを分析対象とした。

まず、各作品における共行動の割合は、図2に示すようになった。プリンスが登場しない「メリダとおそろしの森」を除くと、最初の作品「白雪姫」が最も共行動は少ない。ここから時代を経るに従い、徐々にプリンセスとプリンスの共行動が増えていることがわかる。

この割合が作品によって異なるか、カイ二乗検定を行なった。その結果 $\chi^2(11) = 2989.986$ $p < .001$ となり、有意差がみられた。残差分析（1%水準）の結果、有意に共行動の割合が高かったのは、「美女と野獣」「ポカホンタス」「プリンセスと魔法のキス」「塔の上のラプンツェル」「アナと雪の女王」であった。反対に、有意に低かったのは「白雪姫」「シンデレラ」「眠れる森の美女」「リトル・マーメイド」「アラジン」「ムーラン」「メリダとおそろしの森」である。

England *et al.* (2011) による3期の分類に対応させると、初期・中期と比べ、最近の作品は、プリンスが登場しない「メリダとおそろしの森」を除き、プリンセスとプリンスの共行動が多くなり、共に行動することによって愛が育まれる傾向が強く描かれるようになってきている。これにより、プリンスとプリンセスの恋愛描写に対してプロセスが重要な位置づけになってきたという既存研究（England *et al.*, 2011など）の論考が全体として確認されたものと考えられる。

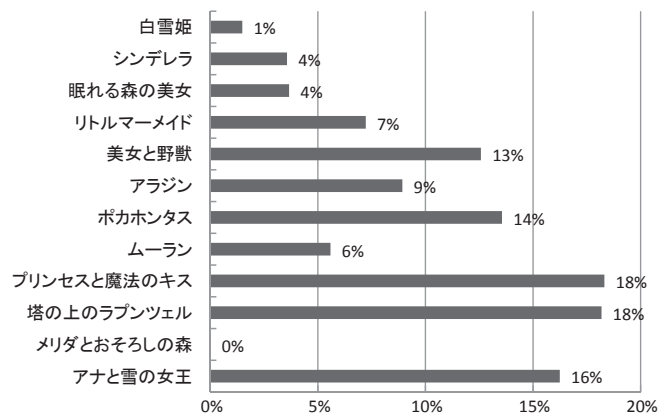


図2 プリンセスとプリンセスの共行動時間（本編の時間に占める割合）

プリンセス—プリンス間の援助行動シーン

プリンセス—プリンセス間の援助行動シーンを抜き出したところ表3に示す結果となった。初期の3作品ではプリンスからプリンセスに対する援助のシーンのみみられた。しかしリトル・マーメイド以降の作品からは、徐々にプリンセスからプリンスに対して援助行動がみられるようになった。また、「美女と野獣」「ポカホンタス」「ムーラン」においては、プリンセスからの援助行動シーンの数がプリンスからの援助行動の数を上回る作品となった。「アナと雪の女王」のアナについては、ハンズ王子とクリストフの二人の男性が登場するため、それぞれを分けて、アナとの援助行動を抽出した。表3に示されたように、ハンズ王子からアナへの援助行動はみられたが、アナからの援助行動はみられなかった。一方でクリストフという場合では、クリストフからアナへの援助行動だけでなく、アナからクリストフへの援助行動もみられた。アナにおいては、ハンズというプリンスには守られ、クリストフという一般男性であるプリンスには守る—守られる両方の関係が成立している。

表3 プリンセスプリンセス間の援助行動

作品名	王子やプリンセス	援助シーンの内容
白雪姫	王子→白雪姫	キスをして目覚めさせる
	王子→白雪姫	馬に乗せるため抱き上げる
シンデレラ	なし	
眠れる森の美女	フィリップ王子→オーロラ姫	キスをして目覚めさせる
リトル・マーメイド	アリエル→エリック王子	嵐で船から海に投げ出されたエリックを陸にあげる
	エリック→アリエル	陸に漂着したアリエルを城に招く
	エリック→アリエル	転覆したボートからアリエルの手を引いて起き上がらせる
	エリック→アリエル	アリエルに襲いかかるアースラの腕に矢を投げる
	エリック→アリエル	アリエルを殺そうとするアースラを殺す
美女と野獣	ベル→ビースト	オオカミと戦い倒れたビーストを城に連れて帰る
	ベル→ビースト	オオカミに傷つけられた腕を手当する
	ベル→ビースト	文字が読めないビーストを手伝う
	ベル→ビースト	ガストンに刺されて落ちそうになるビーストを引っ張り上げる
	ビースト→ベル	永久に城で暮らすベルのために部屋を用意する
アラジン	アラジン→ベル	森でオオカミに襲われるベルを助ける
	ビースト→ベル	苦しむ父を見て悲しむベルを釈放する
	ジャスミン→アラジン	衛兵に捕まるアラジンを王女として離せと命じる
	アラジン→ジャスミン	泥棒として腕を切られそうになるジャスミンを兄弟のふりをして助ける
	アラジン→ジャスミン	建物を登るときに手を差し出す
	アラジン→ジャスミン	踊るジャスミンを支える
	アラジン→ジャスミン	衛兵から逃げるためジャスミンの手を引く
ポカホンタス	アラジン→ジャスミン	魔法のじゅうたんにジャスミンを乗せるため手を差し出す
	アラジン→ジャスミン	ジャファーに砂時計に閉じ込められたジャスミンを助け出す
	ポカホンタス→ジョン・スミス	村に来たジョンを仲間に見つからないように一緒に逃げる
	ポカホンタス→ジョン・スミス	バウタンに殺されそうになるジョン・スミスをかばい止めさせる
	ポカホンタス→ジョン・スミス	ジョン・スミスを殺そうとするココアムにしがみついて止めさせようとする
ムーラン	ムーラン→ジョン・スミス	痛みを和らげる柳の木の皮を渡す
	ジョン・スミス→ポカホンタス	ポカホンタスが知らないものを教える
	ムーラン→リーシャン	フーに責められるリーシャンを元気づける
	ムーラン→リーシャン	雪崩から逃げるためにリーシャンの手を引く
	ムーラン→リーシャン	雪崩に巻き込まれて気を失うリーシャンを引き上げ馬に乗せる
プリンセスと魔法のキス	ムーラン→リーシャン	シャン・ユーに殺されそうになるリーシャンを靴を投げて気を引く
	リーシャン→ムーラン	死刑になるはずのムーランを殺さずに追放する
	ティアナーナヴィーン王子	カエルになったナヴィーン王子を人間に戻すためキスをする
	ティアナーナヴィーン王子	ワニに食べられそうになるナヴィーン王子を引き上げる
	ティアナーナヴィーン王子	キノコのみじん切りを手を取って教える
	ナヴィーン王子→ティアナ	捕まりそうになるのを逃げるため手を引く
	ナヴィーン王子→ティアナ	人間に捕まったティアナを助けに行く
塔の上のラプンツェル	ナヴィーン王子→ティアナ	ティアナにダンスを教える
	ナヴィーン王子→ティアナ	鍋の中に落ちそうになるティアナを掴む
	ナヴィーン王子→ティアナ	建物に登るときに手を差し出す
	ラプンツェル→フリン・ライダー	店の男たちに捕まり、殴られそうになるフリン・ライダーを男たちを殴りとめる
	ラプンツェル→フリン・ライダー	衛兵たちに追いつめられるフリン・ライダーを髪を投げて助ける
	ラプンツェル→フリン・ライダー	手の傷を魔法の髪で治す
	ラプンツェル→フリン・ライダー	マキシマスに連れて行かれるフリン・ライダーを引っ張り止める
	ラプンツェル→フリン・ライダー	刺されたフリン・ライダーを魔法で生き返らせる
	フリン・ライダー→ラプンツェル	灯りを見せるガイドになる
メリダとおそろしの森	フリン・ライダー→ラプンツェル	衛兵が店に来たときラプンツェルを抱えて隠れる
	フリン・ライダー→ラプンツェル	マキシマスに追いつめられるラプンツェルを髪を持ち飛べと叫ぶ
	フリン・ライダー→ラプンツェル	走って逃げるラプンツェルの髪を拾い一緒に逃げる
	フリン・ライダー→ラプンツェル	街で長い髪を引きずるラプンツェルの髪を拾う
	フリン・ライダー→ラプンツェル	ゴータル逃がすため髪を切る
	なし	
	アナと雪の女王	ハンズ→アナ
ハンズ→アナ		スカートに躓いて転びそうになるアナの手を引く
ハンズ→アナ		苦しむアナを抱きかかえる
アナ→クリストフ		クリストフが買えなかった商品を買って渡す
アナ→クリストフ		オオカミに襲われるクリストフを荷物を持ってオオカミを追い払う
アナ→クリストフ		崖から落ちそうになるクリストフに命綱を投げて引っ張り上げる
アナ→クリストフ		マシマロウから逃げるために命綱を切る
クリストフ→アナ		ノースマウンテンに連れて行く
クリストフ→アナ		崖を飛び越えるときにアナを投げてスヴェンの背中に乗せる
クリストフ→アナ		一人でエルサの所へ行こうとするアナを引き留め一緒にエルサの所へ向かう
アナと雪の女王	クリストフ→アナ	岩山から飛び降りるアナを受け止める
	クリストフ→アナ	雪に埋もれたアナを抱き上げる
	クリストフ→アナ	アナの髪を治すためトロールの所に案内する
	クリストフ→アナ	倒れるアナを支える
	クリストフ→アナ	愛する人のキスで魔法が解けると知りハンスのもとに連れて行く

考 察

本研究では、プリンセスが登場するディズニーの12作品を対象にして、プリンセスの描き方の時代的变化を、作動性に焦点をあてて検討した。作動性の指標として用いたのは、プリンセスの話す時間、攻撃的行動の数である。初期の作品と中期の作品ではプリンセスが話している時間は短く、2000年代以降に「話す」ことで自己主張するプリンセスが登場していることが確認された。プリンセスの攻撃行動は、「リトル・マーメイド」以降の作品からは少しずつ描写が登場しているものの数は少なく、行動についても自分自身や誰かを守るためのものに限定されている。

また本研究では、プリンセスとプリンスの共行動時間を測定し、近年のプリンセスはプリンスと一緒に行動する中で愛を育む傾向があるとの従前の論考を確認することを試みた。分析の結果、初期・中期と比べ、2000年代以降の作品は、男女の共行動が以前の作品に比べて多くなり、共に行動することによって愛が育まれる傾向が強くなるようになっていくことが確認された。

さらに本研究では、プリンセスとプリンスの力関係を示す指標として、両者間で行われた援助行動にも注目した。初期の3作品ではプリンスからプリンセスに対する援助のシーンのみが描かれていたが、「リトル・マーメイド」以降の作品からは、徐々にプリンセスからプリンスに対して援助行動がみられるようになり、プリンセスからの援助行動がプリンスからの援助行動を上回る作品（美女と野獣、ポカホンタス、ムーラン）もあった。特に興味深いのは、「アナと雪の女王」のアナである。アナは一目惚れをしたハンス王子との関係においては、一方的に援助をうけるのみである。しかしクリストフに対しては援助される・するという双方向的な関係を構築している。プリンセスとプリンスにおいて、守る・守られるという相互関係が描かれている点が近年の作品の特徴と言えるだろう。

以上のように、全体としてみると、ディズニープリンセス映画で描かれるプリンセスの作動性は時代とともに高まってきているといえる。これは、プリンセスがアンドロジニー的になってきたとする既存研究の指摘に一致している。ただし、このことが、ジェンダーステレオタイプからの解放を必ずしも意味しているわけではない。例えば冒頭で述べたように、「アナと雪の女王」に登場するエルサは作動性を、アナは共同性を、それぞれ体現した存在であるが、物語の結末では、作動性を獲得するだけではプリンセスは幸せではなく、共同性を備えることが一番重要なことだというメッセージがほめかされている。共同性の獲得を女性の達成に最も重要なこととして位置づけるこの結末は、ジェンダーステレオタイプをむしろ強調するものとなっている。ディズニープリンセス映画におけるジェンダー描写は、古典的なものから変化しているものの、「フェミニズム的な配慮がある」（齊藤, 2014）とされる「アナと雪の女王」においても根本的な部分では女性性からの逸脱には保守的な姿勢を崩していない。

ディズニー映画は、他の映画作品と比較すると保守的な傾向をもつが、その一方で「かなり自らの作風に自覚的」（齊藤, 2014）でもある。プリンセス物語の時代的变化を考察することの意義は、保守的なディズニー映画における決められたフォーマットの中で女性がどのように描かれるのかを、時代の変化を映す鏡として分析することにあると考える。

最後に、本研究の問題点と課題について述べる。本研究では内容分析の過程に主観的な解釈が入りにくいよう、話す時間・攻撃行動シーン数・援助行動シーン数・共行動の時間を指標として取り上げた。ただし、攻撃行動や援助行動の抽出にも解釈が入り込む余地があったこと、本研究においてシーン抽出は第2著者が一人でおこなっていたという問題が残る。信頼性を高めるためには、複数者が評定をし、一致率を算出することも必要だったと考える。また、攻撃行動や援助行動については大まかなシーン数の比較のみにとどまっていることも問題である。作動性描写の変化を追う際には、攻撃行動の分類や時間測定等を行うことでより細かな検討が可能になると考える。また、ディズニープリンセスのジェンダー偏向の問題は、映画そのものだけでなく、その商品化・販売促進の過程で、ステレオタイプ化された「女の子らしさ」が規範として強調されることにもある（Orenstein, 2011）。この意味では今後、映画だけでなく、HPの記述内容や商品そのものを対象にした分析も必要と考える。

引用文献

- 土肥伊都子・廣川空美・水澤慶緒里（2008）. 共同性－作動性尺度の構成概念妥当性の検討：A test of construct validity of Communion-Agency Scale (CAS) 研究紀要 人文学・自然科学篇 49, 1-16.
ディズニーストア 〈<http://store.disney.co.jp/>〉（2015年11月30日）

- Durkin, K., & Nugent, B. (1998). Kindergarten children's gender-role expectations for television actors. *Sex roles*, **38**, 387-402.
- Eagly, A. H., & Steffen, V. J. (1984). Gender stereotypes stem from the distribution of women and men into social roles. *Journal of personality and social psychology*, **46**, 735-754.
- Eggermont, S. (2006). Television viewing and adolescents' judgment of sexual request scripts: A latent growth curve analysis in early and middle adolescence. *Sex roles*, **55**, 457-468.
- England, D. E., Descartes, L., & Collier-Meek, M. A. (2011). Gender role portrayal and the Disney Princesses. *Sex Roles*, **64**, 555-567.
- Frueh, T., & McGhee, P. E. (1975). Traditional sex role development and amount of time spent watching television. *Developmental Psychology*, **11**, 109.
- Giroux, H. (1997). Are Disney movies good for your kids. In S. R. Steinberg, & J. L. Kincheloe (Ed.), *Kinderculture: The corporate construction of childhood*. Westview Press, pp.53-67.
- 興行通信社 (2016). 「歴代興行ベスト100」2016年1月25日現在
〈<http://www.kogyotsushin.com/archives/alltime/>〉 (2016年1月29日)
- 国広陽子・東京女子大学女性学研究所編 (2012) メディアとジェンダー 勁草書房
- Lacroix, C. (2004). Images of animated others: The orientalization of Disney's cartoon heroines from The Little Mermaid to The Hunchback of Notre Dame. *Popular Communication*, **2**, 213-229.
- Leeper, C., Breed, L., Hoffman, L., & Perlman, C. A. (2002). Variations in the Gender - Stereotyped Content of Children's Television Cartoons Across Genres. *Journal of Applied Social Psychology*, **32**, 1653-1662.
- McRobbie, A. (2008). Young women and consumer culture: An intervention. *Cultural studies*, **22**, 531-550.
- 諸橋泰樹 2009 メディアリテラシーとジェンダー 現代書館
- 萩上チキ (2014). デイズニープリンセスと幸せの法則 星海社新書
- Orenstein, P. (2006). What's Wrong With Cinderella? *The New York Times*. (December, 24).
〈http://www.nytimes.com/2006/12/24/magazine/24princess.t.html?pagewanted=2&_r=1&ei=5088&en=8e5a1ac1332a802c&ex=1324616400&partner=rssnyt&emc=rss〉 (2015年11月30日)
- Orenstein, P. (2011). Cinderella Ate My Daughter William Morris Endeavor Entertainment, LLC, New York. (オレンスタイン P. 日向やよい (訳) (2012). プリンセス願望には危険がいっぱい 東洋経済新報社)
- 斉藤環 (2014). 「女性の社会化」がはらむ矛盾 微熱, 138 (2014年6月号), 17-21.
- Rudman, L. A. & Heppen, J. B. (2003). Implicit Romantic Fantasies and Women's Interest in Personal Power: A Glass Slipper Effect? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1357-1370.
- Serewicz, M. C. M., & Gale, E. (2008). First-date scripts: Gender roles, context, and relationship. *Sex Roles*, **58**, 149-164.
- 照沼かほる (2012). ラプンツェルの「冒険」ーデイズニー・プリンセスのゆくえ2 福島大学行政社会学会「行政社会論集」24, 59-92.
- The Walt Disney Company (2015). Disney Princess 〈<http://princess.disney.com/>〉 (2015年11月30日)
- The Wald Disney Company (2005). Disney princess proves she's still the fairest of the land; girls' lifestyle brand set to become world's largest in 2006.
〈<https://thewaltdisneycompany.com/disney-news/press-releases/2005/06/disney-princess-proves-shes-still-fairest-land-girls-lifestyle>〉 (2015年11月30日)
- Thompson, T. L., & Zerbinos, E. (1995). Gender roles in animated cartoons: Has the picture changed in 20 years? *Sex roles*, **32**, 651-673.
- Towbin, M. A., Haddock, S. A., Zimmerman, T. S., Lund, L. K., & Tanner, L. R. (2003). Images of Gender, Race, Age, and Sexual Orientation in Disney Feature-Length Animated Films. *Journal of Feminist Family Therapy*, **15**, 19-44.
- 若桑みどり (2003) お姫様とジェンダーーアニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門 筑摩書房.
- Williams, T. (1981). How and what do children learn from television?. *Human Communication Research*, **7**, 180-192.

Williams, J. E., & Best, D. L. (1982). *Measuring sex stereotypes: A thirty-nation study*. Sage Publications, Inc.

李修京・高橋理美 (2011). ディズニー映画のプリンセス物語に関する考察 東京学芸大学紀要 人文社会科学系, I, 62, 87-122.

註

- 1) 本研究は、第2著者の卒業論文(2014年度 立正大学心理学部)のデータの一部を用い、再分析・再構成したものである。
- 2) 東京ディズニーリゾートのオフィシャルHPでは、2016年1月現在「ディズニープリンセス～ようこそ、リトルプリンセス～」のページ(<http://www.tokyodisneyresort.jp/special/princess/>)があり、プリンセス物語の紹介、プリンセスになるための心得、ヘアアレンジ方法の紹介、投稿写真コーナーなどが設定されている。ただし、物語として詳しく紹介されているプリンセスは、シンデレラ、オーロラ姫、白雪姫、ベル、ラプンツェルの5キャラクターである。また、日本のディズニーストア(<http://store.disney.co.jp/>)のキャラクター一覧では、「ディズニープリンセス」として紹介されているのは、ラプンツェル、アリエル、シンデレラ、ベル、オーロラ姫、白雪姫、ジャスミン、計7キャラクターのみである。日本では、ポカホンタス、ムーラン、ティアナ、メリダは、ディズニープリンセスとして認知されていない様子がうかがえる。